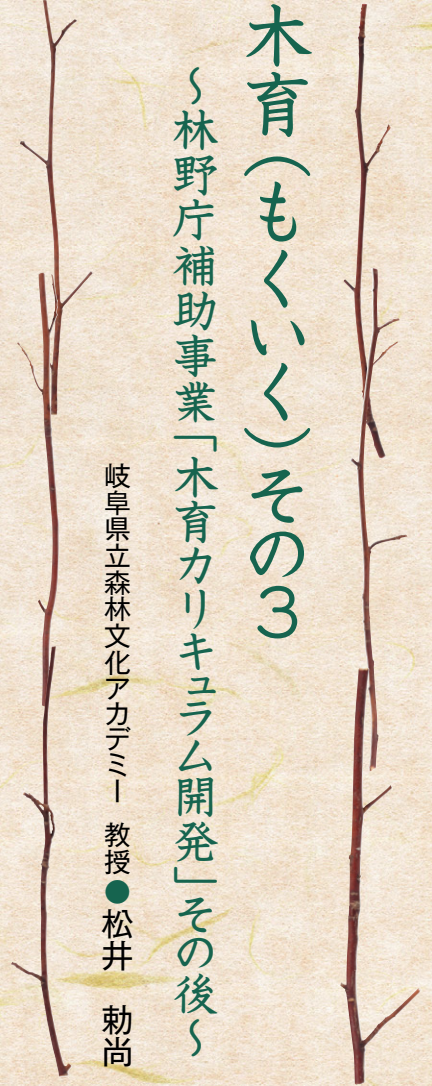


木育（もくいく）その3

林野庁補助事業「木育カリキュラム開発」その後

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 ● 松井 勅尚



● 私たちは子どもたちに何を
まねてほしいのでしょうか？

年齢と教育の結びつきを重視するシユタイナー教育によると、0〜7歳は、人生の中でもっとも模倣力の強い時期だそうです。就学前の子どもにとっては、模倣による学びが基本であり、しかも自身のからだを動かすことでしか学ぶことができず、周囲の大人はまねされても良い振る舞いや空間を意識することがとても重要であると言われています。では、私たちに出来ることは何でしょうか？

● 「子どもたちが、

箸を噛まなくなりました！」

保育士さんから頂いたこの言葉は衝撃でした。

アカデミーでは、地元の保育園の協力のもと、22年度から3年間、林野庁補助事業として『就学前児童及び保護者を対象とした木育カリキュラム開

発』^{※1}を実施しました。これは、その成果をまとめる際、各園から頂いたコメントの一つです。

この園では、4歳児を対象に、箸づくりを行いました。箸は、形がとてもシンプルであり表現の幅は狭く、「4歳児では根気が続かないのでは？」と危惧したくらいです。確かにつくっている時にはそんな場面もありましたが、園の暮らして使う場面では、「箸を落とさなくなり：箸づかいも片付けも含め、何だか子どもたちが食事の時間をとても大切に過ごしているように感じます。」とコメントを頂きました。

木育5つの力を育みましょう^{※2}

1. 木と樹のつながりを感じる力が育ちます
2. モノを大切に心が育ちます
3. 工夫する力が育ちます
4. 根気や、やる気が育ちます
5. 協力する心、気づかう心が育ちます

こんな子どもたちの姿には保育士さん自身も驚いたそうです。子どもの可能性を信頼し、挑戦させることが、このような思いがけない結果を生んだようです。

● 木づくり、使うこと
育まれること

カリキュラム開発のため視察させて頂いた、木工教育で有名な幼稚園の先生が、「木育には5つの力があるとされていますが、このうち、1と2の意識が私たちには薄いかもしれない…」と話されたことが印象的でした。つまり、今使っている木が、いのちある樹であること。そして、暮らしの中で「つかい↓なおす↓つかう」つながりを通してモノを大切にすることを育むこと。つまり、「いのち」を大切にすることを育むことが、つくり、つかう木育講座の役割でもあることに気づかされました。

● いのちの移し替え

宮大工の西岡常一さんは、樹を伐ることは、樹を殺すことではなく「いのちの移し替え」と言われたそうです。子どもたちの心にも、箸を単なる道具ではなく、そこには生きた樹の姿があり、その命の移し替えのお蔭で、暮らしてできること、だからこそ大切に扱うこと、そんな心が育っているように感じました。

つくり、つかうことで、暮らしが変わること。「木育は森林と人のいのちに関わること」。今後も伝えていきたいと思えます。

教材は、良きプログラムと人を得て初めていのちを得ます。3年間ともに森林と人を活かす知恵を共有し、その後も木育を続けていただいている保育士さんたちに感謝します。

※1日本グット・トイ委員会 筑波大学との共同研究
『育』黎明書房



園児がつくった、スキの箱椅子・ヒノキの膳・サクラの箸・カエデのスプーン